

阿多多羅

第105号

発行

令和7年2月28日

責任者

福島県公立学校

退職校長会安達支部

伊藤末吉

【巻頭言】

出会った方々に感謝



顧問 小島喜一

私は、一九二八（昭和三）年の生まれで、満九十六歳を迎えました。が、来し方を顧みますと、自己の意思決定には多くの方々との出会いがあり、その方々の影響を直接、間接に受けていることが分かりました。

ところで私の家は、曾祖父の代まで神主でありましたので、父は私を神主にしたいと考えていたようですが、明確な意思決定はありませんでした。一方、母は私を教員にしたいと考えていたようですが、家族以外で私の人生に影響を与えた方を考えてみますと、隣家

の先輩菊池四郎氏と父と又従兄弟の古川盛雄氏の存在に気づきました。

菊池四郎氏は私の七歳上で、上海の東亞同文書院を卒業、戦時中は中国で従軍、戦後は福島民報社に入社、副社長で退社しましたが、東亞同文書院在学中は帰省する度に流暢な中国語で中国の珍しい話をしていただき、終戦後もご厚誼をいただき、私の中国志向は菊池氏によって高められました。

また、父の又従兄弟の古川盛雄氏は、戦前は中国の上海厚生医科大学教授、同大学学長を務

め、戦後は二本松で古川産婦人科医院を再開業、傍ら洋画界、教育界に貢献しておりましたが、たびたび夕食時に招待され、中国国民政府主席汪兆銘（精衛）の話や中国人を侮蔑することがなかったので無事帰国できたこと等々、氏の中国観を聞くことができ、私の中国志向は一層高められました。

私は両氏の影響により、大学で中国近代史を履修する目的で、一九四九（昭和二十四）年、福島大学文学部四年課程社会科に入学しました。しかし、運命の悪戯か、専攻科目の申告期限の迫ったある日、偶然、中国古史ご専門の佐久間吉也教授と出会い、教授の誠意ある勧めにより中国古史を専攻することになりました。このようなわけで、中国近代史の専攻は叶えられませんでした。大学では中国の国家主席毛沢東に親書を送った中国哲学の永澤要二教授や現代中国の様子を話してくれる中国語の成田昌信教授など多くの先生との出会いがあり、時にはご自宅を訪問してご指導をい

ただくこともありました。

卒業後は、東北史学会や東北中国学会の会員として中国古代史の研究成果を発表していただきましたが、会津工業高校奉職時、会津史談会長の友田康雄氏と出会い、孫文の会津亡命説を知りました。これ以来、私の中国研究は古代史から近現代史へと転換いたしました。

退職後特筆すべきものは、二〇一〇（平成二十二）年に自由民権運動家平島松尾顕彰会を創設したことと、翌平成二十三年に福島県中国交流史学会を創設したこととであります。前者は福島女子高校で仕えた高橋哲夫校長が自由民権運動研究家であったことと関係しており、後者は二本松出身で辛亥革命時に孫文に物心両面から支援した鈴木天眼の生家当主鈴木省司氏との出会いがあったからであります。現在、私は両会とも会長兼事務局ですが、これまでにご指導ご援助いただいた方々に感謝申し上げるとともに、生きがいを感じながら活動をいたしております。



【教育随想】



コミュニティ・スクールの実践

安達地区小中学校長会協議会

会長 佐藤 隆 宏

近年の子どもを取り巻く環境も含めた複雑かつ多様な課題は、学校だけではやはり解決することはできず、学校や地域、関係機関が一体となって「社会総がかりでの教育」による取組が不可欠となっています。

この「社会総がかりでの教育」を実現するためには、これまでの「地域から意見をいただくだけの開かれた学校」から、さらに一歩踏み出し、地域と学校との方向性を合わせ、地域ではどのような子どもを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」へと転換していくことが重要です。

一方、子どもたちの成長に焦点を当ててみると、子どもたちが急激な社会の変化の中で、自分の人生を切り拓く「生きる力」を育むためには、「信頼できる大人たちとの関わり」から自己肯定感や主体性、多様性、協働性を身につけさせることが不可欠

になります。

そこで、まず私たちは「人がつながりともに創る みんなの学校」というスローガンを掲げ、二本松一中が目指すこれからの学校の姿を示しました。次に、「地域とともにある学校への転換」、「信頼できる大人たちとの関わりの機会創出」のコンセプトから、未来の担い手となる松一つ子を育もうとしました。そして、具体的な取組の3本柱を次のように設定しました。

一 育てたい子どもの姿を共有します

子どもたちが主体となって、校則や学校行事を自分たちの手で創り上げる、また、自分の想いや願いを説得力のある言葉でプレゼンテーションする協議の場を意図的に設け、学校教育を通じてどのような能力・資質を育み、保護者や地域の皆さんの想いにどのようにこたえていくのか、生徒提案型の学校運営協議会で共有し、ご理解をいただくプロセスを踏むことが「人がつなが

りともに創る みんなの学校」への出発点となります。

二 親しみやすい学校をつくります

地域がつながる場として、みんなが訪れたい、親しみやすい学校環境をつくる必要があります。まずは、子どもたちの活動の様子や学校の正確な情報を積極的に発信し、さらに、子どもたちにとって安全で安心できる、質の高い教育環境づくりをより一層進めるとともに、学校施設のさらなる開放や施設の共同管理等を通じ、親しみやすい学校にしていきたいと思います。

三 子どもを育む活動をともに進めます

まずは学校や地域の実情に応じて可能な活動からスタートし、その成果を発信・共有することにより、参加者の数を増やし、協働活動の輪を広げます。学校教育を持続可能なものとするためには、こうした子どもと大人の関わり合いによる好循環を生むことが重要だと考えております。

「松一つが目指すこれからの学校の姿」を学校づくりの指針とし、保護者、地域の皆さんとのつながりの輪の中で、「心豊かにたくましく生きる」松一つ子を育んでまいります。



現職校長との教育懇談会開催

令和六年十二月六日（金）

に二本松御苑において、毎年恒例となっている『退職校長と現職校長との教育懇談会』が開催されました。本会会員三十五名、現職校長三十七名が参加し、今年度も盛大な会となりました。

懇談会冒頭では、伊藤末吉本会支部長の挨拶に続き、佐藤隆宏小中学校長会協議会会長（二本松一中）挨拶、伊藤勝宏高等学校長代表（安達高



伊藤支部長挨拶

校）挨拶がありました。

その後、八つのグループに分かれてのグループ別自由討議方式で教育懇談会が始まりました。

各グループでは、和やかな自己紹介から始まり、その後、現職の校長先生方から、各学校の特色や現状、課題となっていることなどについて発表がなされました。それを受けて、退職校長先生方は、質疑



グループ協議

等でさらに深く各学校の現状を理解したうえで、それぞれの課題等に、これまでの経験を活かしたアドバイスをしました。今年度も有意義な懇談会となりました。

懇談会の後は、石川不二雄本会顧問による乾杯の発声で、懇親会が和やかに開催されました。

毎年多くの参加者があるこの教育懇談会は、今後もぜひ継続していきたい大事な事業の一つであることを再認識しました。



石川顧問による乾杯



和やかな懇親会

☆☆心よりご冥福を
お祈り申し上げます☆☆

添田 和 良様

令和七年一月二十四日

（ご逝去（八十六歳））

○元南戸沢小学校長

松本 正義様

令和七年二月三日

（ご逝去（八十歳））

○元二本松第三中学校長

☆お二人の先生の

ご功績に深い敬意と

感謝を捧げます。

遠方からのたより

ガンズウ、ウヤキ

伊東 博

(沖縄県宮古島在住)

「愛唱歌集」をめくっていたら「船頭さん」という歌が出てきて、歌詞の中に「村の渡し船頭さんは、今年六十のお爺さん 年はとつても、お船をこぐ時は元氣いっぱい櫓がしなる」とあり「今年六十のお爺さん！」。六〇才がお爺さんとは、いつ頃かと思ったら、昭和十六年七月キングレコードとありました(武田俊子作詞)。

私は昭和十一年生まれなので私が五才の頃には、六十才は世間が認める「お爺さん」だったのです。現在六十才は、まだまだ元氣で働き盛りですね。私は五月に、八十九才になります。

当時、八十九才の年令だったら、何と呼ばれていたでしょうか？仙人か浦島太郎とでも！



宮古島では、健康で長生きし充実した人生を送っている人のことを「ガンズウ、ウヤキ」と呼んでいます。私もそれに少しでも近づきたいと思って、朝ラジ体操を行い、サイクリングを日課にしています。

宮古島では、毎年「トライアスロン大会(遠泳、自転車、マラソン)」が行われているので空港道路の両側に緑のラバーがひかれた「サイクリング専用道路」が整備されています。私は毎日、その道路で四キロのサイクリングを行っています。又、天気の良い日には、コバルトブルーの海を眺めながら海岸線を自転車走っています。

現在、まあまあ元気に過ごしています。

会員十年目の近況報告

私も「古希」に至る



高島徹也

十年前の退職の日、あの日の空は真つ青だった。「道終えて見上げし空の青き色 浮かびし子等の 幸を祈らん」その眩しい青空を目を細めて見上げていた自分を懐かしく思い出す。そして、これからの第二の人生を如何に過ごし如何に歩んでいくかに思いを巡らせた私であった。「少しでも家族を支えていこう。」「地域や組織、社会の一員として、その一隅を照らしていこう。」「やりたかったことを、ゆつたりと楽しみ、叶えていこう。」退職後、そんな思いを抱き果たしつゝ実りある日々を過ごし、こうして古希に至ることができたことは大いなる喜びであり、同時に「ありがたい」と感謝の念に包まれている私である。

日々の生活そのものは、平凡な何気ない日常の繰り返しである。

るが、四季の景色や季節の移り変わりを味わい、折々の伝統的行事や風習を継承し楽しみつつ穏やかな日々を過ごしている。湯気と香りの浮き立つ朝餉や夕餉。妻との何気ない会話やショッピング、掃除や修理の共同作業。庭の草むしりを終えた後のコーヒータム。等々、楽しみや喜び、幸いというもの、どんな細やかなことにも豊かに宿っていることを、つくづく思う。

うとともに、この穏やかな日々、何気ない変わらざる日常のありがたさを、しみじみと深く感じている。また、古希という年齢に至り心身や記憶力等の衰えは否めない私であるが、しかし、これまで見えなかったことが見えるようになり、これまで気付かなかったことが気付くようになった、新たな学びも多々あり、その意味では、まだまだ人生学びの途上であり「日暮れて途遠し」と言えよう。

妻と魔訶般若心経をお唱えしつつ安達三十三観音を参拝し終えた私は、明日からの新たな学びの人生を、さらに実りあるものにと願い、健康に留意し、心晴々、心清々しく歩もうと、心新たにしているところである。

会員十年目の近況報告

なぜ山に登るのか



小林淑人

私も登山が趣味である。私としたのは、「阿多多羅」で鈴木則雄先生、兼谷邦夫先生が山について執筆されていたからである。もともと、その熱量はお二人に比べるとそう高くはなく、山がたまたま好きで登っているとは断言できないでいる。

高校、大学と山岳部に所属しキスリングを背負ってアルプスの峰々を縦走し、ジャンダルムやオベリスクに立ちもしたが、半世紀前のことなので、感動の記憶は薄れてしまった。勤めてからは、学校登山で安達太良山に登った程度で、格別山に行きたいとは思わなかった。

それが三年前、目覚めたように登り始め、古希を迎える今、一年に二十数座もの頂きに立っているのはなぜだろう。

ひとつは、せまりくる老化に抗いたいからであろう。切実に感じる体力の衰えを理由に守り

の姿勢になりたくないからである。山頂を目指すための忍耐と持久力を自分に課し、新たな目的をもち、挑戦し続けたいからであろう。

二つ目は、妻の気持ちに応えたいからであろう。山の動画を閲覧し百名山の書物を読みふける、そんなすっきり山にハマった妻から「次は〇〇山に行こうね」と言われて首を横に振るわけにはいかない。日頃すっかりお世話になっていいるのだから。

というわけで、私はもっぱら遠距離運転手となって青森へ長野へと高速を走らせ、妻の歩く後ろ姿を写真に収めている。

可憐な高山植物に、遙かなる槍や穂高の山並みに感動しきりの妻、騒がしくもあるが、いつしか共感し、今が一番幸せと感じている自分がある。これが山に登る真の理由かもしれない。



残雪の月山に登る
R6.6.27

「これまでの十年、

そして、これからは・・・」



君島勇吉

「退職したら南会津に戻る」

これが、両親の微かな願い。

分かつてはいたが。再就職を理由に、土曜・日曜に架けて帰省することで折り合いをつける。

季節の移り行きを、車の窓から眺める野山の色の変化で感じながら、片道2時間余りの一泊二日の旅。

「実家で笑顔で待つ両親」

家の掃除や庭の手入れ。妻は手料理を振る舞い「食欲や体調」を気遣い、2・3日の食事を冷蔵庫に作り置く。

空いた時間で農作業を始める。耕作面積は5アール弱。「両親の助言」を得ながら、猿などからの被害防止のため、里芋、ゴボウ、山芋等の根菜を栽培。それからエゴマ。エゴマは、大半を油にして食する。

また、季節の山菜。路の藁から始まり、ゼンマイ、ワラビ、

山ウド、タラの芽、舞茸と、雪解けの初春から11月の初冬まで、野山の実りをいただく。

もう一つの楽しみが溪流釣り。空が明るくなる早朝を待ち、車で数分の釣り場に出かけ、5匹を目安に岩魚や山女と向き合う。20cm以下はリリース。これが私流の決め事。釣り上げた魚は、捌いて即冷凍。後日、炭火で塩焼きにして孫たちに。その美味しそうな笑顔がたまらない。

こうした一泊二日の妻との旅行も、昨年で終了。3年前に母が、昨年5月に父が他界。

約10年間、毎週欠かすことのなかった帰省。一抹の寂しさを感じながら幕を閉じる。

そして、これからは・・・

火曜・金曜は、学習支援員として福島市内の中学校で「数学」の授業に参加。コロナ後の授業は大きく変化。一人一台のタブレット。教師は手元で全員の反応を確認できる。新たな教育機器は、授業を変えるかな？



新入会員の挨拶

「感謝と恩を

忘れずに」



佐藤 健夫

この春、なんとか教職を全うすることができ、定年退職することとなりました。今思うと「ああすればよかった」と反省ばかりです。昨年度の春に本宮市立本宮第一中学校を役職定年し、一年間の定年延長に伴う新たな制度の特任任用校長として、本宮市立白岩小学校にお世話になりました。新しい制度の下での職務であり、少し戸惑いもありましたが、職員をはじめ保護者や地域の方々、何よりも子どもたちの明るい笑顔に支えられ、定年を迎えることができたこと、本当に幸せであると感じています。そしてこれまで赴任したどの学校でも、関わった全ての方々に感謝いたします。

振り返ってみると、これまでの教員生活では様々な経験をさせていただき、充実した教員人生を送ることができたと思っ

います。

学校を取り巻く環境は大きく変化し、今後教育への期待は益々大きくなっていくと思われます。子どもたちが生きる将来には、仕事の働き方やその種類も多様化するとともに、ライフワークバランスがとても重要になってくると思います。将来を見据えたキャリア教育の必要性など学校としての役割が益々重要になってくることで、さらには社会人となった人に対するのりカレント教育など、とても大切なものとなり、社会の中で、学校が何らかの形でその役割を担うことが期待されているのかも知れません。今後の学校の対応力も試されるかのようなのです。

春は出会いと別れの季節。私も新たなステージに立ち、そして新たなスタートを切ります。これまで育んだ人とのつながりや学びがきつと次のステージを素晴らしいものにしてくれると信じています。

「感恩戴徳」心からありがたいと思ひ、恩を忘れず 敬愛の念を持ちながらこれからもがんばっていきたいと思います。

本当にありがとうございます。

ほんとの授業を

目指して

遠藤 幸栄

昭和三十九年
一月生まれ、私

たちの世代は役職定年制が施行され、退職年齢も一年延長されました。したがって、私はこの春、晴れて正式な定年を迎えます。

思えばこの三十八年間、様々な出会いがあり、辛い時もありましたが、愉しく充実した日々を送ることができました。

支えてくれた妻には、心から感謝の言葉を贈りたいと思います。校長を任されたのは二校でしたが、最後に地元安達中学校に赴任することができました。達中の先生方はベテラン揃い。経験を積まれて文武両道、真っ直ぐに生徒と向き合っておられました。

教科指導は勿論、部活動指導でも、各先生に個性があり、仕上がりを見据えて着々と準備を重ねる姿、私にとっては毎日が学びの連続でした。私はかつて、現職教育に没頭した理科教師でしたが、ここは余計な口を挟まず、子どもたちのために思

いっきり打ち込みたい先生方を応援することに決めました。達中生の活躍には目を見張りました。校長室には優勝旗が五本並び、高校入試でも福島市内の学校に劣らない実績。これは、先代、先々代と続く校長先生方が種を播き、水を遣り、日の光を当て続けてくださったおかげでした。

ところで、今年私は、新採用教員の研修をコーディネートする仕事を務めています。松一、松二、松三、安達の四校を周り、授業を参観し、大学の講義や書籍では実感しにくかった様々な教育活動がもつ意味、本質が理解できるよう自分の失敗を紹介しながら解説する仕事です。若い先生方は、ICTを駆使して私たちにはできなかった側面から、生徒の心を揺さぶり、教科の魅力を掴ませる授業を行います。そんな授業を目の当たりにすると、思わず私も授業がしたくなります。でも教壇を離れて十六年、無理かなあ、でも「ほんとの授業」をもう一度目指したい。そんな思いを抱かせてくれる若者に感謝しながら、今日も車を走らせています。